

## 誠実性の類似が対人魅力に及ぼす効果

— Big Five 性格理論の枠組みを用いて —

# Effects of Similarity relevant to Conscientiousness on Interpersonal Attraction

— An Application of the Big Five Personality Traits Model —

戸塚 唯氏

Tadashi TOZUKA

本研究は、Big Five モデルの枠組みを採用し、誠実性の性格側面に関して対人魅力に及ぼす類似性の効果を実験的に検討した。分析対象者は143名（男性80名、女性63名）で、独立変数は参加者の誠実性、描写人物の誠実性、描写人物の性、従属変数は好ましき得点、友人希望得点であった。まず彼らに誠実性に関する項目に回答させ、その後架空の人物に関する文章を読ませ、さらにそれらの人物に関する項目に回答させた。分散分析の結果、友人希望得点に関して参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用が見いだされた（10%水準の有意傾向）。すなわち、誠実性の高い参加者は誠実性の高い描写人物の得点が高く、誠実性が低い参加者は誠実性が低い描写人物の得点が高い傾向が見いだされた。この結果から誠実性の側面における性格の類似が対人魅力に影響を与えている可能性が示唆された。一方、好ましき得点については同様の交互作用は見いだされなかった。

### 1. 問題

#### 1. 1 研究の背景

教育現場においては教師が生徒の意欲関心を評価するし、会社場面においては上司が部下の評価を行う。また野球チームのレギュラーを選ぶような際にも監督は個々の選手の能力を評価している。このように社会においては様々な場面で他者に対する評価が行われており、公平で正確な評価が求められる。しかし、評価者が公平・正確を期していたとしても、評価者が自覚できない様々なバイアスが混入し、評価がゆがめられている可能性がある。その一つとして挙げられるのが類似性によるバイアスである。

類似性が対人評価に及ぼす影響については社会心理学

の対人魅力領域において古くから研究がなされてきた。例えばByrne & Nelson<sup>1)</sup>は、いろいろな社会事象に対する態度の類似性を取り上げ、被験者が自分と態度の類似している対象をより魅力があると評定したことを報告している。また藤森<sup>2)</sup>は態度の類似性や話題の類似性を取り上げ、類似している対象がより魅力的に見えたことを報告している。

また、態度の類似性だけでなく「性格」の類似性が対人魅力に及ぼす影響も検討されており、例えばHill, Rubin, & Peplau<sup>3)</sup>やStevens, Owens, & Schaefer<sup>4)</sup>は性格の類似性が対人魅力に正の影響を与えていることを示唆している。一方でAjzen<sup>5)</sup>は他者が自分と類似した肯定的特性を持っていると認知した場合に限ってその他者を好意的に評価すると主張している。すなわち自分のある特徴が好ましくないと考えているような場合、その特徴を持っている他者に対して好意を持たないと予測しているのである。中里・井上・田中<sup>6)</sup>も類似した相手ではなく、社会的に望

連絡先：戸塚唯氏 ttozuka@cis.ac.jp

千葉科学大学教職課程

Professional Teaching Course, Chiba Institute of Science

(2016年9月9日受付, 2016年12月13日受理)

ましいと思われる特性を持った人を好意的に評価したことを報告している。このように性格の類似が対人魅力に及ぼす効果についての研究結果はやや混乱しており、類似性の効果が存在するのか、存在するとしたらどの程度の影響力なのかについて明らかにできていない。最終的な結論を出すにはさらなる研究が必要であると思われる。

## 1. 2 Big Fiveモデルと本研究の目的

個人の全体的な性格を明らかにする尺度としてはBig Fiveモデル<sup>7)</sup>やエゴグラム<sup>8)</sup>等が存在する。これらの尺度は人間が複数の側面から成るものとしてとらえており、例えばBig Fiveモデルは、開放性(Openness: 想像力、好奇心の強さ、新しいものへの志向性、遊び心などに関する構成概念)、誠実性(Conscientiousness: 自己統制、意思の強さ、まじめさなどに関する構成概念)、外向性(Extraversion: 外の世界への志向性、社交性、活動性などに関する構成概念)、調和性(Agreeableness: 協調性、控えめさ、利他性などに関する構成概念)、情緒不安定性(Neuroticism: 不安傾向、緊張の強さ、敏感さなどに関する構成概念)といった5つの次元を提唱している。またエゴグラムは、厳しい父親のような側面(Critical Parent)、やさしい母親のような側面(Nurture Parent)、合理的な大人のような側面(Adult)、無邪気な子どものような側面(Free Child)、従順な子どものような側面(Adapted Child)の5次元を提唱している。Big Fiveモデルやエゴグラムが主張するように人間の全体的な性格が複数の側面から成っているものとするれば、対人魅力に及ぼす影響を検討するにはその側面ごとに類似性の効果を検討することが必要であろう。上述の研究をはじめとして、これまでの研究の多くは外向性-内向性の性格側面のみを取り上げてその類似性の効果を検討しているが、性格の類似性が対人魅力に及ぼす影響を総合的に明らかにするためには、それ以外の性格側面についても研究が必要であろうと思われる。

外向性以外の性格側面を用いて検討している研究に戸塚・上北・狩野<sup>9)</sup>がある。この研究ではBig Five尺度を利用して、情緒不安定性の類似性が対人魅力に及ぼす影響を検討している。その結果、実験参加者が情緒不安定性の側面で類似している他者を好むという結果は見受けられず、情緒が安定している他者を好むという結果が得られた。この結果は、中里他<sup>5)</sup>の「類似した他者でなく、社会的に望ましい特性を持つ人を好む」のだという主張を支持するものであった。また戸塚・狩野・上北<sup>10)</sup>は、Big Fiveモデルの調和性が対人魅力に及ぼす影響を検討した。その結果、実験参加者は調和性が高い他者を好んだ(すなわち社会的に望ましい特性を持つ対象を好んだ)が、「部分的に、調和性の高い実験参加者は低い実験参加者よりも、調和性の高い描写人物をより好ましく感じ

ていた(すなわち、部分的には類似した他者を好んだ)」ことが報告されている。また戸塚<sup>11)</sup>はBig Fiveモデルの開放性が対人魅力に及ぼす影響を検討した。その結果、実験参加者が開放性の側面で自分と類似している他者を好むという結果は見受けられず、開放性が高い参加者も低い参加者も開放性が高い参加者を好んだ。

上述のように、外向性の他にも情緒不安定性や調和性、開放性に関する研究はあるが、いまだ誠実性の側面に関する研究は見受けられない。そこで本研究はBig Fiveモデルにおける誠実性の側面の類似が対人魅力に及ぼす影響を検討する。本研究によって、誠実性の側面における類似が対人魅力に影響を与えているか否かが明らかになるとと思われる。なお、本研究では結果の比較を容易にするため、参加者の開放性、描写人物開放性、描写人物の性を独立変数として使用した戸塚<sup>11)</sup>の研究に準じて、参加者の誠実性、描写人物の誠実性、描写人物の性を独立変数とした実験を行う。なお、参加人物の性を独立変数として採用することも考慮したが、同様の枠組みを用いて情緒不安定性の類似の影響を検討している戸塚他<sup>9)</sup>の研究で独立変数として採用した参加者の性が従属変数にほとんど影響していなかったことを踏まえて本研究では採用を見送った。

## 2. 方法

### 2. 1 参加者と実験計画

参加者は、千葉県内の日本人大学生151名であった。このデータから、回答に欠損があった者8名のデータを削除し、分析対象者は143名(男性80名、女性63名)、平均年齢は18.77歳( $SD = 0.76$ )であった。

本研究の独立変数は、参加者の誠実性(高・低)、描写人物の誠実性(高・低)、描写人物の性(男性・女性)であった。前者1つが被験者間変数、後者2つが被験者内変数であり、 $2 \times 2 \times 2$ の8条件を設けた。

### 2. 2 実験手続き

実験は2016年7月に大学の講義時間を利用して集団実施した。まず刺激文と質問紙からなる冊子(タイトルは「印象形成に関するアンケート」)を配布し、口頭ならびに小冊子の表紙の文章で教示を行った。なおその際には、①この実験への参加が個人の自由であること、②不参加であってもペナルティはないこと、③回答したくない項目には答えなくてよいことについても説明を行った。

### 2. 3 小冊子の構成

実験で用いた小冊子(表紙を含めてA4用紙11枚)は6つのパートから構成されていた。第1パートは参加者の誠実性を測定する12項目から成っていた。第2パートは「架空の人物A君(男性・中学3年生)に関する記述」

と「A君の印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。A君は誠実性が高いように描写されていた(約463字)。補助資料1を参照。第3パートは「架空の人物B君(男性・中学3年生)に関する記述」と「B君の印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。B君は誠実性が低いように描写されていた(約460字)。補助資料2を参照。第4パートは「架空の人物Cさん(女性・中学3年生)に関する記述」と「Cさんの印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。Cさんは誠実性が高いように描写されていた。Cさんに関する記述はA君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。なお、A・C、B・Dの描写については誠実性を測定する12項目(Big Five尺度の誠実性に関する項目)すべてを参考に作成した。第5パートは「架空の人物Dさん(女性・中学3年生)に関する記述」と「Dさんの印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。Dさんは誠実性が低いように描写されていた。Dさんに関する記述はB君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。第6パートは人口統計学的データを採るための項目から成っていた。

## 2. 4 質問項目

### 2. 4. 1 参加者の誠実性

本研究では、基本的に和田<sup>7)</sup>のBig Five尺度において誠実性を測定する12項目を使用した。ただしよりわかりやすい表現にするため、項目の語尾に手を加えた。すなわち、当の研究では「いい加減な」「ルーズな」という表現を示し、どれだけ参加者が自分に当てはまるかを評定したが、本研究では「いい加減である」「ルーズである」などという表現を使用した。また和田<sup>7)</sup>の研究では「不精な」という表現があったが、現代の大学生にはなじみのない表現のように思われたため、「ずぼらである」とした。使用した12項目は以下のとおりである(●は逆転項目)。「いい加減である(●)」「ルーズである(●)」「怠惰である(●)」「成り行きまかせなところがある(●)」「ずぼらである(●)」「計画性がある」「無頓着である(●)」「軽率である(●)」「勤勉である」「無節操である(●)」「几帳面である」「飽きっぽい(●)」。これらの特徴を自分にどれだけあてはまっているかを7段階尺度で回答させた(まったくあてはまらない1点、非常に当てはまる7点)。これらの12項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、0.81であり、十分な内的整合性があると判断して、これらの12項目の平均を参加者の誠実性得点とした。得点が高いほど誠実性が高いことを示す。

### 2. 4. 2 A～Dさんへの印象

A～Dさんに関する記述を読んで、参加者がA～Dさんをどの程度好ましく思ったかを2項目で測定した

(好ましくない1点、好ましい7点)(友人になりたくない1点、友人になりたい7点)。なおA～Dごとに、この2項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、順に0.68、0.80、0.79、0.86であり、Aの数値がやや低いものの、2項目の平均をそれぞれの印象得点とすることもできる水準であった。しかし同様の項目を使って検討している戸塚他<sup>9)</sup>の研究では十分な $\alpha$ 係数が見いだされておらず、別個の指標として分析していることから、比較のために本研究でも別個に扱うこととした。以後本研究では、順に好ましき得点、友人希望得点と表現する。

### 2. 4. 3 操作チェック項目

本研究では、A君とCさんを誠実性が高いように描写し、B君とDさんを誠実性が低いように描写した。実験参加者が実験者の意図どおりに認識したかを明らかにするために、当該の描写人物がどの程度誠実的であるかを「ずぼらでない1点、ずぼらである7点(●)」「計画性がない1点、計画性がある7点」「几帳面でない1点、几帳面である7点」という項目で回答させた(●は逆転項目)。なおA～Dごとにこれら3項目の $\alpha$ 係数を算出したが、その値は順に0.51、0.47、0.49、0.57で、あまり高くなかったため、これらについても別個に扱うことにした。以降、本稿では順にずぼらさ得点、計画性得点、几帳面さ得点とする。

ところで、Big Fiveモデルでは、誠実性の他に調和性、外向性、情緒不安定性、開放性といった性格側面を想定しているが、これらは互いに独立であるとみなされているわけではなく、ある程度の相関があると考えられている。そのため、本研究のように描写人物の誠実性を操作した場合に、他の側面(開放性など)もつられて操作されてしまうことが考えられる(交絡)。誠実性の効果を検討する上でこのような交絡が生じることは望ましくないが、そもそもBig Fiveモデルの5側面が相関のあるものとして設定されているので、それらを完全に独立に操作するのは不可能である。そのため、本研究でも他の4側面の影響が混入してしまうことを完全に避けられず、例えば従属変数に対して描写人物の誠実性の主効果が見いだされたとしても、厳密には誠実性だけでなく、調和性や開放性などの影響が混入しているといえる。しかし注意深く実験刺激を作成することによって交絡を低減することはできるであろうし、実験目的を明らかにするうえで大きな障害にはならないだろうと思われる。ただ、どの程度、どのような交絡があるのかは明らかにしておくべきであり、そのため本研究では描写人物の誠実性の他に、調和性、外向性、情緒不安定性、開放性についても評定させ、どのような交絡が生じていたのか明らかにする。使用した項目は下記のとおりである。「温和でない1点、温和である7点」、「外向的でない1点、外向的である7点」、「動揺しにくい1点、動揺しやすい7点」、「独

創的でない1点、独創的である7点」。順に調和性得点、外向性得点、情緒不安定性得点、開放性得点と表記する。

#### 2. 4. 4 人口統計学的変数

参加者の学年、性別、年齢、日本人であるかどうかを尋ねた。

### 3. 結果

#### 3. 1 実験操作の適切性の検討

まず「参加者の誠実性」の実験要因を作るために誠実性得点 ( $M = 3.86, SD = 0.80$ ) を使って、参加者を二分した。誠実性得点の中央値は3.83であり、ちょうどその得点であった6名のデータを削除し、これより得点の高かった者たちを誠実性高条件 ( $n = 70$ ; 男性42名、女性28名)、低かった者たちを誠実性低条件 ( $n = 67$ ; 男性37名、女性30名) とした。誠実性高条件 ( $M = 4.52, SD = 0.48$ ) と低条件 ( $M = 3.19, SD = 0.47$ ) の誠実性得点を比較したところ、その差は有意であり ( $t(135) = 16.29, p < .001$ )、この分割が適切であることが確認された。

次に、「描写人物の誠実性」の実験操作の適切性を確認するために、ずぼらさ得点、計画性得点、几帳面さ得点をそれぞれ従属変数としたt検定を行った。その結果、3つの得点全てに関して有意な結果が得られた(順に ( $t(273) = 27.92, p < .001$ )、( $t(273) = 40.18, p < .001$ )、( $t(273) = 43.20, p < .001$ ))。また全ての得点で描写人物の誠実性が高条件の得点が低条件よりも高かった。

次に、描写人物の誠実性を含む実験操作要因によってBig Fiveモデルの他の4側面がどの程度影響を受けたのかを明らかにするために、調和性得点、外向性得点、情緒不安定性得点、開放性得点を従属変数としたANOVAを行った。いずれも独立変数は参加者の誠実性(高・低)、描写人物の誠実性(高・低)、描写人物の性(男性・女性)である。調和性得点に関するANOVAでは、描写人物の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 57.35, p < .001$ )、参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用 ( $F(1,135) = 4.31, p < .05$ ) が見いだされた。下位検定の結果、参加者の誠実性の高条件および低条件において描写人物の誠実性の単純主効果が見いだされた(順に  $F(1,135) = 45.30, p < .001, F(1,135) = 139.72, p < .001$ )。どちらも描写人物の誠実性高条件において調和性得点が高かった。また描写人物の誠実性低条件において参加者の誠実性の単純主効果が見いだされた ( $F(1,270) = 19.97, p < .001$ )。参加者の誠実性高条件の方が低条件よりも調和性得点が高かった。一方、描写人物の誠実性高条件では参加者の誠実性の単純主効果は見いだされなかった。外向性得点に関するANOVAでは、参加者の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 6.20, p < .05$ ) 描写人物の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 21.35, p < .001$ )、描写人物の性の主

効果 ( $F(1,135) = 14.82, p < .001$ ) が見いだされた。すなわち描写人物の誠実性低条件よりも描写人物の誠実性高条件の方で、また描写人物が男性よりも女性の方で、外向性得点が高かった。交互作用は見いだされなかった。情緒不安定性得点に関するANOVAでは、主効果および交互作用は見いだされなかった。開放性得点に関するANOVAでは、描写人物の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 7.79, p < .01$ ) が見いだされた。すなわち描写人物の誠実性低条件よりも高条件で開放性得点が高かった。また参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用 ( $F(1,135) = 10.70, p < .001$ ) も見いだされた。下位検定の結果、参加者の誠実性の高条件において描写人物の誠実性の単純主効果が見られた ( $F(1,135) = 18.39, p < .001$ )。すなわち描写人物の誠実性が高い場合よりも低い場合で開放性得点が大きかった。また描写人物の誠実性の低条件において参加者の誠実性の単純主効果が見られた ( $F(1,135) = 13.23, p < .001$ )。すなわち参加者の誠実性が低い場合よりも高い場合で開放性得点が高かった。各実験条件の操作チェック指標の平均と標準偏差を表1に示す。また各性格側面の相関係数を表2に示す。

#### 3. 2 A～Dさんへの印象に対する実験操作要因の影響

好ましき得点、友人希望得点を従属変数として3要因のANOVAを行った。いずれも独立変数は参加者の誠実性(高・低)、描写人物の誠実性(高・低)、描写人物の性(男性・女性)である。各実験条件の好ましき得点と友人希望得点の平均と標準偏差を表3に示す。

好ましき得点に関するANOVAでは描写人物の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 527.67, p < .001$ ) が見いだされた。すなわち、描写人物の誠実性高条件 ( $M = 5.86, SD = 1.12$ ) の方が低条件 ( $M = 2.91, SD = 1.22$ ) よりも好ましき得点が高かった。また、描写人物の性の主効果 ( $F(1,135) = 16.37, p < .001$ ) が見いだされた。すなわち、女性条件 ( $M = 4.54, SD = 1.82$ ) の方が男性条件 ( $M = 4.23, SD = 1.93$ ) よりも好ましき得点が高かった。その他の主効果、交互作用は見いだされなかった。

次に、友人希望得点に関するANOVAの結果、描写人物の誠実性の主効果 ( $F(1,135) = 277.85, p < .001$ ) が見いだされた。すなわち、描写人物の誠実性高条件 ( $M = 5.52, SD = 1.30$ ) の方が低条件 ( $M = 3.34, SD = 1.38$ ) よりも友人希望得点が高かった。また、描写人物の性の主効果 ( $F(1,135) = 13.20, p < .001$ ) が見いだされた。すなわち、女性条件 ( $M = 4.60, SD = 1.68$ ) の方が男性条件 ( $M = 4.26, SD = 1.76$ ) よりも友人希望得点が高かった。さらに参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用 ( $F(1,135) = 7.66, p < .01$ ) が見いだされた。下位検定を行ったところ、参加者の誠実性高条件において描写人物の誠実性の単純主効果が見いだされた ( $F(1,135) =$

表1 操作チェック得点の平均と標準偏差

参加者の誠実性 描写人物の誠実性 描写人物性	<i>n</i>	H				L			
		H		L		H		L	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
ずぼらさ得点	<i>M</i>	5.71	5.82	2.11	2.45	6.40	6.13	2.13	2.05
	<i>SD</i>	(1.62)	(1.47)	(1.23)	(1.41)	(1.18)	(1.34)	(1.65)	(1.25)
計画性得点	<i>M</i>	6.48	6.57	1.95	2.00	6.58	6.59	2.07	2.01
	<i>SD</i>	(1.35)	(0.86)	(1.25)	(1.07)	(1.31)	(0.62)	(1.62)	(1.23)
几帳面さ得点	<i>M</i>	6.22	6.38	2.11	2.07	6.59	6.38	2.01	2.14
	<i>SD</i>	(1.35)	(0.92)	(1.12)	(1.04)	(0.69)	(0.83)	(1.29)	(1.18)
調和性得点	<i>M</i>	5.48	5.50	3.91	4.15	5.31	5.52	4.50	4.70
	<i>SD</i>	(1.26)	(1.29)	(1.52)	(1.28)	(1.23)	(1.21)	(1.47)	(1.18)
外向性得点	<i>M</i>	3.78	4.12	4.58	4.71	3.89	4.34	4.97	5.26
	<i>SD</i>	(1.38)	(1.54)	(1.61)	(1.53)	(1.44)	(1.45)	(1.54)	(1.20)
情緒不安定性得点	<i>M</i>	3.81	3.84	3.68	3.57	3.97	3.62	3.74	3.86
	<i>SD</i>	(1.48)	(1.33)	(1.60)	(1.46)	(1.46)	(1.40)	(1.74)	(1.42)
開放性得点	<i>M</i>	3.95	4.30	4.05	4.05	3.83	3.89	4.70	4.83
	<i>SD</i>	(1.27)	(1.08)	(1.43)	(1.17)	(1.51)	(1.14)	(1.23)	(1.27)

注: 表中の「H」は参加者の誠実性あるいは描写人物の誠実性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

表2 各性格側面間の相関

	誠実性 得点1	誠実性 得点2	誠実性 得点3	調和性 得点	外向性 得点	情緒性 得点	開放性 得点
誠実性得点1(ずぼらさ得点)							
誠実性得点2(計画性得点)	0.74 **						
誠実性得点3(几帳面さ得点)	0.76 **	0.92 **					
調和性得点	0.34 **	0.40 **	0.42 **				
外向性得点	-0.24 **	-0.21 **	-0.24 **	0.18 **			
情緒性得点	-0.01	0.02	0.04	-0.13 **	-0.09 *		
開放性得点	-0.15 **	-0.09 *	-0.09 *	0.10 *	0.26 **	-0.11 *	

\*\*  $p < 0.1$ , \*  $p < 0.5$  誠実性得点1は得点を逆転したものである

表3 好ましさ得点、友人希望得点の平均と標準偏差

参加者の誠実性 描写人物の誠実性 描写人物性	<i>n</i>	H				L			
		H		L		H		L	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1.好ましさ	<i>M</i>	5.77	6.04	2.65	3.00	5.79	5.85	2.71	3.26
	<i>SD</i>	(1.31)	(0.90)	(1.15)	(1.39)	(1.15)	(1.02)	(0.95)	(1.20)
2.友人希望	<i>M</i>	5.52	5.87	2.98	3.34	5.16	5.52	3.38	3.67
	<i>SD</i>	(1.32)	(1.13)	(1.41)	(1.42)	(1.44)	(1.15)	(1.25)	(1.29)

注: 表中の「H」は参加者の誠実性あるいは描写人物の誠実性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

440.23,  $p < .001$ )。すなわち、描写人物の誠実性高条件 ( $M = 5.70, SD = 1.25$ ) の方が低条件 ( $M = 3.16, SD = 1.43$ ) よりも友人希望得点が高かった。同様に参加者の誠実性低条件においても描写人物の誠実性の単純主効果が見いだされた ( $F(1,135) = 225.15, p < .001$ )。すなわち、描写人物の誠実性高条件 ( $M = 5.34, SD = 1.32$ ) の方が低条件 ( $M = 3.53, SD = 1.29$ ) よりも友人希望得点が高かった。さらに、10%水準の有意傾向であるものの、描写人物の誠実性高条件において参加者の誠実性の単純主効果が見いだされた ( $F(1,135) = 3.70, p < .10$ )。すなわち参加者の誠実性高条件 ( $M = 5.70, SD = 1.25$ ) の方が低条件 ( $M = 5.34, SD = 1.32$ ) よりも友人希望得点が高い傾向がみられた。また描写人物の誠実性低条件においても有意傾向の参加者の誠実性の単純主効果が見いだされた ( $F(1,135) = 3.53, p < .10$ )。すなわち参加者の誠実性低条件 ( $M = 3.53, SD = 1.29$ ) の方が高条件 ( $M = 3.16, SD = 1.43$ ) よりも友人希望得点が高い傾向がみられた。その他の主効果、交互作用は見いだされなかった。

#### 4. 考察

##### 4. 1 操作チェックについて

ずぼらさ得点、計画性得点、几帳面さ得点に関して、描写人物の誠実性の主効果が見いだされた。これらの結果から描写人物の誠実性の操作は成功したとみなした。次にBig Fiveモデルの他の4側面への実験操作要因の影響についてだが、あらかじめ予想していたように、調和性、外向性、情緒不安定性、開放性得点でいくつかの主効果や交互作用が見られた。本研究の主要な目的から外れてしまうので詳述しないが、描写人物の誠実性に関して得られた主効果についてだけ述べると、描写人物の誠実性高条件のA君(Cさん)は低条件に比べて誠実性を高く評価されただけでなく、調和性も高く評価されていた。また描写人物の誠実性低条件のB君(Dさん)は高条件に比べて外向性や開放性を高く評価されていた。この結果は、描写人物の誠実性の操作によって実際には調和性や外向性、開放性までも影響を受けていたことを示す。

また、相関係数を算出したところ、誠実性と調和性、誠実性と外向性、誠実性と開放性の間には弱い～中程度の相関が見いだされており、このことから若干の交絡が生じていたことがうかがえる。本研究の結果の解釈は、この点を踏まえた上でなされるべきである。

##### 4. 2 性格の類似が対人魅力に及ぼす影響

好ましき得点に関しては性格の類似の効果は見られなかったが、友人希望得点に関しては参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用が見いだされ、性格の類似の影響を示唆する方向での単純主効果(10%水準)が見いだされた。すなわち、誠実性が高い参加者は低い参加者

よりも誠実性が高い対象と友人になりたいとする程度が高く、誠実性が低い参加者は高い参加者よりも誠実性が低い対象と友人になりたいとする程度が高い傾向が見られた(表4)。この結果は性格が類似していると思える他者に対して評価が好意的になりやすい可能性を示しており、誠実性側面における性格の類似が対人魅力に関わっている可能性を示している。

表4 参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用に関する平均と標準偏差

		描写人物誠実性	
		H	L
参加者	H	<i>M</i>	5.70
		<i>SD</i>	(1.25)
誠実性	L	<i>M</i>	5.34
		<i>SD</i>	(1.32)

注:表中の値は友人希望得点である。

注:表中の「H」は参加者の誠実性あるいは描写人物の誠実性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

特に、「誠実性が低い参加者は高い参加者よりも誠実性が低い対象と友人になりたいとする程度が高い」という結果は、興味深い。これまで「ある属性(例えば外向性)が高く描写されている対象に対して、当の属性が高い参加者が低い参加者よりもよい印象を持つ」という結果は得られているが、「ある属性が低く描写されている対象に対して、当の属性が低い参加者が高い参加者よりもよい印象を持つ」という結果は得られていない。例えば、戸塚・狩野・上北<sup>12)</sup>では、外向性が高く描写されている対象に対して、外向性が高い参加者が低い参加者よりも良い印象を持ったという結果が得られたが、外向性が低く描写されている対象に対して、外向性が低い参加者が高い参加者よりも良い印象を持ったという結果は得られなかった。また調和性の側面を扱った戸塚・狩野・上北<sup>10)</sup>でも同様である。本研究の結果は、誠実性が低いという社会的に言えば望ましくない特徴を持つ描写人物に対して、誠実性が低い参加者の方が良い印象をもったというものであり、社会的に望ましくない特徴の類似も対人魅力に正の効果をもたらすことがあることを初めて示した。ただし今回得られた単純主効果は10%水準の有意傾向であり、かつ好ましき得点では同様の結果が得られなかったことから、結果の解釈には一定の留保が必要であろう。またその影響も社会的望ましき影響に比べれば小さいといことにも注意しなければならない。

### 4. 3 今後の課題と展望

上述のように、本研究では参加者の誠実性と描写人物の誠実性の交互作用が見られ、誠実性側面の性格の類似が印象に及ぼす影響が示唆されたが、下位検定における単純主効果は10%レベルのものであった。性格の類似性の効果の存在を大きく期待させる結果ではあるものの、本研究の結果だけでは誠実性側面の類似が対人魅力に確実に影響していると断言することはできない。今後、実験刺激や測定項目、参加者数を改善した上で再度検討する必要があると考える。

また本研究では、描写人物の誠実性の操作チェックのために Big Five 尺度で12ある誠実性項目の中から3つを選び使用したが、項目数の少なさのためか、 $\alpha$ 係数が低く内的整合性に問題があった。この点についても今後、12項目すべてを使用した再検討が必要であろう。さらに、本研究では Big Five モデルが提唱する誠実性だけを検討したが、将来的には、5側面すべての性格特性を同時に扱い、性格の全体的な類似の効果を検討していくことが必要である。5つの側面の性格全てが自分と類似している他者に対しては、より大きな類似性の効果が見られるかもしれない。

本研究では確実な証拠は得られなかったが、性格の類似性が対人魅力に影響を与えるという知見が正しいものであれば、それは非常に重要である。例えば教育場面においては教師が児童生徒の意欲関心を評価することが多いが、それらは客観式テストではなくおおむね教師の観察によって評定される。しかし観察は主観的な手法であり、教師が公平な評価を期していたとしても様々なバイアスが混入してしまう可能性がある。性格の類似によるバイアスは評価する者にとって自覚しづらいものであると推測され、結果的に自分に似た（似ていない）対象に対して実際よりも好意的な（非好意的な）評価を下してしまう可能性がある。教育現場だけでなく会社場面における人事評価でも同様のことが起こりうるだろう。どのような性格の類似がどの程度の影響を持つかを明らかにすることができれば、社会の様々な領域においてよりよい人物評価が可能になると思われる。適切な人物評価を実現するためにもこの領域の研究は重要であると言える。

さらに性格の類似に関する知見は教育相談やカウンセリングなどにおいても有用かもしれない。教育相談場面では担任教師がしばしば児童生徒の悩みを聞くが、担任教師がうまく教育相談をリードできず、児童生徒の心を開いてやれないことも多い。そのような場合には担任教師の代わりに児童生徒と年齢の近い若い教師や同性の教師、ベテランの教師等をあてることがあるが、そのような教師よりもむしろ児童生徒と性格が類似している教師をあてた方が当の児童生徒から好感をもたれやすく、相談活動がうまくいく可能性がある。現段階では類似性の

効果の大きさが十分明らかになっていないので、教育相談等への応用はあくまで可能性の話ではあるが、筆者は大きな期待を持っている。大学や大学院での教員養成段階や、教員となった後の教員研修などでこのようなバイアスの存在を知らせたり、性格の類似性に配慮した教育相談の在り方を考えさせることによってより良い指導が実現すると思われる。これらの他にも類似性の知見を応用できる領域はあまた存在するだろうと思われ、今後、この分野のさらなる発展が望まれる。

### 引用文献

- 1) Byrne D, & Nelson D : Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 374-380, 1965.
- 2) 藤森立男：態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果—魅力次元との関連において—。実験社会心理学研究, 20, 35-42, 1980.
- 3) Hill C. T, Rubin Z, Peplau L.A : Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues*. 32, 147-168, 1976.
- 4) Stevens G, Owens D, Schaefer E.C : Education and attractiveness in marriage choices. *Social Psychology Quarterly*, 53, 62-70, 1990.
- 5) Ajzen, I. : Effects of information on interpersonal attraction: Similarity versus affective value. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 374-380, 1974.
- 6) 中里浩明, 井上徹, 田中国夫：人格類似性と対人魅力 — 向性と欲求の次元 —。心理学研究, 46, 109-117, 1975.
- 7) 和田さゆり：性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成。心理学研究, 58, 158-165, 1996.
- 8) 新里里春訳：エゴグラム。創元社, 1980 (Dusay J.M : *Egograms : How I see you and you see me*. N.Y., Harper & Row, 1977) .
- 9) 戸塚唯氏, 上北彰, 狩野勉：情緒不安定性の類似が対人魅力に及ぼす効果 — Big Five 性格理論の枠組みを用いて —。千葉科学大学紀要, 4, 45-53, 2011.
- 10) 戸塚唯氏, 狩野勉, 上北彰：調和性の類似が対人魅力に及ぼす効果 — Big Five 性格理論の枠組みを用いて —。国際教育研究所紀要, 22, 31-41, 2011.
- 11) 戸塚唯氏：開放性の類似が対人魅力に及ぼす効果 — Big Five 性格理論の枠組みを用いて —。千葉科学大学紀要, 9, 35-41. 2016.
- 12) 戸塚唯氏, 狩野勉, 上北彰：年少者に対する評価における類似性バイアス。国際教育研究所紀要, 15, 17-27, 2005.

# Effects of Similarity relevant to Conscientiousness on Interpersonal Attraction

— An Application of the Big Five Personality Traits Model —

Tadashi TOZUKA

*Professional Teaching Course, Chiba Institute of Science*

Many studies examined the effects of similarity of the character on interpersonal attraction. But most of them examined only on extroversion. Big Five personality model predicted human character consists of five traits (extraversion, openness, conscientiousness, agreeableness, and neuroticism). This study examined the effects of similarity relevant to conscientiousness on interpersonal attraction by using Big Five personality model framework. Participants were Japanese university students (80 men and 63 women). Independent variables of this study were participant's conscientiousness (high and low), described person's conscientiousness (high and low), and described person's sex (male, female). After responding to conscientiousness questionnaires, participants evaluated attractions of four described persons. The results of ANOVA showed that on "want-to-be-friend" score an interaction between participant's conscientiousness and described person's conscientiousness was found (10% significant level). Therefore, high conscientiousness participant's score on described highly conscientiousness person was higher than low conscientiousness participant's score. And low conscientiousness participant's score on described lowly conscientiousness person was higher than high conscientiousness participant's score. This result indicated that there was a trend of effect of similarity in conscientiousness. On the other hand, there were not any interactions on favorability score.

### 補助資料1. A君に関する描写

A君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。A君はクラスでめだつタイプではありませんが、几帳面(きちょうめん)でなかなかしっかりしています。例えば、勉強面で言えば定期試験も2週間前から計画的に準備をしていますし、苦手な数学も後回しにせずに取り組んでいます。そのせいもあって成績はなかなか良いようです。担任の先生も志望校への進学は問題なさそうだと思っています。

またA君は陸上部に入っていて、長距離(3000m)を得意としています。自分で細かく目標を定めて筋トレやフォームの改良などをコツコツと行い、着実にタイムを縮めています。秋には中学最後になる大会がありますが、それなりの順位を狙えそうです。A君は人との約束も可能な限り守るようにしています。待ち合わせなどで約束の時間に遅れることはめったにありませんし、友だちに借りたものは期日までに必ず返しています。

このようにA君は堅実な性格をしていますといえます。友達にA君のことを比較的ジミなヤツだと思っているようですが、一方でコツコツと努力できるところをすごいと思っもいるようです。

### 補助資料2. B君に関する描写

B君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。B君は成績は中程度で、スポーツも不得意ではありません。親しい友達もいます。ただちょっとルーズだったり無計画なところがあります。例えば、勉強面で言えば定期試験前でもあまり計画的に勉強しませんし、苦手な数学の準備は特に後回しにしがちでほとんど勉強せずに試験を迎えることもあります。

またB君は陸上部に入っていて、長距離(3000m)を得意としています。練習はサボりがちで、計画的・継続的に練習をすることも苦手なようです。秋には中学最後になる大会がありますが、このままだとあまり良い順位は狙えそうもありません。B君は人との約束に関してもルーズなところがあり、待ち合わせの時間に20～30分程度遅れることもしばしばです。友達に何か借りても、借りたことをすっかり忘れて、返さないままにいてしまうこともあります。

このようにB君は少々ズボラなところがあります。決して自己中心的というわけではないのですが、結果的に約束を破ってしまうことも多く、友だちとトラブルになってしまうことがあります。